

ニュートンと「恩恵」のゆくえ

久野陽一

外国語教育講座

Tracing “Grace” in John Newton

Yoichi KUNO

今日よく知られている「アメイジング・グレイス」(“Amazing Grace”)という歌の作者, 正確には歌詞を書いたのは, ジョン・ニュートン (John Newton) という18世紀のイングランド人である。彼は, 奴隷貿易に関わった後, 改心して牧師になった人物で, 同時代の奴隷貿易廃止運動 (abolition movement) にも影響があった。ここでは, 「アメイジング・グレイス」の重要な背景として, ニュートンの「驚くばかりの」伝記のなかにかなる「恩恵」=「神の恵み」(grace)があったのかを追っていきたい。まず最初に, この歌が今日のようなポピュラリティを得るにいたるまでのいきさつに簡単に触れておく。

1

「アメイジング・グレイス」の原典は, ニュートンがはじめて牧師の職を得たノーサンプトンのオルニーという村で書いた賛美歌集に載った。1779年出版のその『オルニー聖歌集』(Olney Hymns) は, 友人で詩人のウィリアム・クーパー (William Cowper) との共著だが, 収録されている詩の大半はニュートンが書いた。礼拝の会衆のための賛美歌, いわゆる “congregational hymns” は17世紀後半から18世紀にかけての宗教歌の「新機軸」であった (Rivers 468)。アイザック・ワッツ (Isaac Watts) やウエズリー兄弟 (John and Charles Wesley) に代表されるこの流れに, ニュートンも属している。そのなかでニュートンの賛美歌は, ワッツの敬虔な感受性やウエズリーの信仰復興運動の熱狂とは異なった, 「書くのは簡単ではないとしても, 本質的にはよりシンプルで新しいタイプの賛美歌」(Marshall and Todd 89)だと評価される。ただし, 『オルニー聖歌集』のなかでも後にもっとも有名になった「アメイジング・グレイス」に, この時点では現在知られているタイトルはなかった¹⁾。またこの時点では, この詩は既存の賛美歌のメロディをつけて歌われ, われわれがよく知っているメロディはまだつけられていない。さらに, その後の時代, たとえば19世紀を通じて, このニュートンの詩はイギリスの賛美歌集にほとんど

収録されなかった。そのため, その後はほぼ忘れ去られようとしていた。

しかし, 「アメイジング・グレイス」はイギリスの旧植民地アメリカにおいて生き残った。当時アメリカでは第二次大覚醒 (the Second Great Awakening) と呼ばれる宗教運動が進行中で, そうした集会では, ウエズリーやワッツとともに, ニュートンの賛美歌もよく歌われていたらしい。イギリスで忘れ去られようとしていたニュートンの詩が, アメリカの賛美歌集には多く収録されていく。

そうしたなかで, このニュートンの詩は, 運命のメロディと合体する。そのメロディは「ニュー・ブリテン」(“New Britain”)と呼ばれていた。作者その他の起源は不明だが, 旋律から推測してスコットランドやアイルランドのケルト系の曲だと思われる²⁾。この旋律に20世紀の初頭に多少装飾的なメロディがついたものが, ほぼ今日われわれが知っている「アメイジング・グレイス」である。この過程で, もとの詩のいくつかのスタンザは省略されたり, まったく別のスタンザが挿入されたりした。そうして, 20世紀を通じてこの歌は, 黒人のゴスペルのスタンダードとして, また白人の側でも公民権運動に関わったフォーク・シンガーに取り上げられたりしながら, アメリカ国民がもっとも好きな歌のひとつになる。そして周知のように, 現在でもこの歌はアメリカ経由で世界中に広まって親しまれている³⁾。こうして, ノーサンプトンの片田舎で作られ忘れ去られようとしていた「恩恵」が海を渡って今日にいたるわけだ。

さて一方, この「アメイジング・グレイス」という歌の歌詞は, ニュートンの自伝的なものと言われることがある⁴⁾。『オルニー聖歌集』序文でもニュートンは, そこに収録された歌が「私自身の体験が結実し表現されたもの」(Newton and Cowper ix)だと述べている。そこで, つづいて「アメイジング・グレイス」のもうひとつの「ゆくえ」を, 歌詞のなかのフレーズを使うと, ニュートンが「哀れな者」(“wretch”)で, 「迷える者」(“lost”)で, 「目が見えなかった」(“blind”)

ころ、「たくさんの危険や苦難や誘惑をくぐり抜けて」
 (“Through many dangers, toils, and snares”) いたころ、
 そちらのほうに探してみたい⁵⁾。それは18世紀イング
 ランドの福音主義運動から奴隷貿易廃止運動につな
 がる「恩恵のゆくえ」である。

2

ニュートンは1788年、奴隷貿易廃止委員会(the Com-
 mittee for the Abolition of the Slave Trade)のために、『ア
 フリカ奴隷貿易に関する考察』(*Thoughts upon the Afri-
 can Slave Trade*)という政治的パンフレットを刊行し
 た。そのなかで彼は次のように自分を規定している。
 「[アフリカで] 私自身が18ヶ月のあいだ、適切な言
 い方がないのだが、囚われの身 (a Captive) で、しか
 も奴隷のようなもの (a Slave) だった。そして、人間
 としてもっとも哀れな状態 (the lowest degree of human
 wretchedness) までおとしめられたのだ」(*Thoughts* 78)。
 ここでニュートンが言っている「人間としてもっとも
 哀れな状態」の実態とはどのようなものだったのか、
 まず、ニュートンが手紙で自分の半生を綴った自伝『真
 実の物語』(*An Authentic Narrative*)を参照しよう。

ニュートンは、1725年に敬虔な非国教徒を母親とし
 てロンドンで生まれた。ニュートンの父親は、地中海
 貿易に関わる船乗りだった。1732年に7歳で母親を亡
 くしたニュートンは、しばらくエセックスの学校に通
 った後、父親に連れられて早くから航海に出た。この
 父親のコネでジャマイカでの仕事をもらったニュート
 ンは、しかし、1732年出発直前に強制徴募にあつて、
 ハードウィッチ (Hardwich) という軍用船に乗せられ
 る。その船は戦闘に関わるだけでなく、アフリカやイン
 ドと貿易する船の護衛にもあたった。ちょうどその
 船が西アフリカの、当時 “the Windward Coast” と呼
 ばれていた地域まで行ったところで、船長との相性が
 悪かった彼は船から降りてアフリカに留まるという選
 択をする。そして、ニュートンは現地で奴隷の売買を
 おこなっていたイングランド人の下で働くことになる。
 この人物は『真実の物語』では “master” とだけ
 あつて名前は記されていないが、クロウ氏 (Mr. Clow)
 という人物だと推測されている。彼は新しくプラン
 テインズ (the Plantanes) という群島に拠点を構えよ
 うとしていた。ニュートンは、彼にとまってこの島
 に住むことにする。そこでの仕事は、言うまでもなく、
 現地のアフリカ人が内陸部から集めてきた奴隷をまと
 めて、やって来るヨーロッパの船、おもにイングラン
 ド船籍の船に売ることだった。

しかし、1745年その仕事についてからすぐニュート
 ンはマラリアだと思われる病に倒れて寝込んでしま
 う。結局、ニュートンの病気が治るまでのあいだ、ク
 ロウ氏は一人で仕事に出かけ、ニュートンの世話は一
 緒に連れて来ていたアフリカ人の愛人に任せる。この

クロウ氏の愛人の名前も『真実の物語』には “mistress”
 としか記されていないが、後の日誌や手紙から推測し
 て “P. I.” と呼ばれる人物である。彼女は、最初のう
 ちはニュートンを世話していたが、なかなか良くな
 らないと見るやすぐに興味を失い、彼をネグレクトして
 虐待する。この虐待は、マラリアで動けないニュート
 ンにほとんど水も食事も与えないというもの、たとえ
 ば次のようなものだった。「彼女は、自分は豊かな暮
 らしをしながら、私には生きていくのに十分な食料を
 ほとんど与えてくれなかった。ときどき機嫌がいいと
 きだけ、自分が食べた後の残りを私に与えようとした。
 私は (自尊心が全くなくなっていたので) 施しを受け
 る乞食のように、彼女に礼を言ってそれをむさぼり
 食った」(*Authentic Narrative* 76)。

この P. I. というアフリカ女性は現地の王族の血筋
 だったと思われる。彼女は、愛人とはいってもクロウ
 氏を完全に尻に敷いていた。奴隷を上手に集めるため
 に、奴隷商人は現地の有力者、つまりアフリカ人の協
 力が不可欠だったので、彼は P. I. の一族に頼ってい
 た可能性がある。そのためクロウ氏は彼女に口答えで
 きないというわけだ。

いずれにしても、主人の助けも得られないニュート
 ンは、このとき奴隷よりも下の状態だった。支配者で
 あるはずの白人としての「自尊心」が消失した状態だ
 と言ってもいい。これがこのときの彼の “wretchedness”
 である。実際ニュートンは、そこで捕らえられ、売ら
 れていくのを待っている奴隷たちですら哀れむほどの
 状態だった。「ときどき島をはじめ訪れる知らない
 人のおかげで救われた。いや、鎖につながれた奴隷た
 ちでさえ、自分たちのわずかな食事のなかから、(そ
 うしているところを [P. I. に] 見つかるわけにはいか
 ないので) こっそりと食べ物を私のところに運んでく
 れた」(77)。

当時アフリカでは、奴隷売買の基地は「ファクト
 リー」と呼ばれていて、クロウ氏は周辺にいくつかそ
 うした拠点を持っていた。病気が回復したニュート
 ンは、クロウ氏と P. I. から離れて、キッタム (Kittam)
 というところにある「ファクトリー」のひとつに移動
 することが許された。そして、そこでニュートンはま
 た別の「哀れな」状態になる。というよりもむしろ、
 実際に “wretch” という言葉が使われているのは、『真
 実の物語』においては、こちらのほうである。

では、それはどのような状態だったのかというと、
 アフリカに「同化」すること、「白人も黒人化する」、
 つまり、肌の色は変わらなくても気質が黒人になるこ
 とであった。

この地域には、白人が黒くされるといって、よく使
 われるフレーズがある。それは、肌の色ではなく
 気質が黒人に変化することを意味する。私はそう

した例をいくつか知っている。30や40をすぎてアフリカに住み、次第にアフリカ人の気質・習慣・儀礼に同化していった、最後にはイングランドよりアフリカのほうを好むようになった者。彼らは盲目の黒人たちのいかがわしい魔力・呪術・魔除け・予言などの餌食となって、現地にも見つけられるもうすこし賢明なものではなく、そうしたものを信用するようになってしまうのだ。(90)

このとき、ほかならぬニュートン自身もまた、アフリカに「同化」しかけていた。マラリアを生き延びるという気候順応の後、いわば「文化順応」を果たそうとしていることになる。これに続けて彼は次のように述べる。「私もだんだんと夢中になっていき、ある時期に関しては、完全に誘惑に負けてしまったようだ。私は現地人とより親密な関係を持つようになった。もし主が私を見てくださらなかったら、私は哀れな者 (wretch) として彼らのなかで暮らし、そして死んでいったことだろう」(90)。この時期彼はアフリカ人の愛人を持っていた可能性もある。このころニュートンは「自分が幸福だと考えはじめるくらいに哀れな者 (wretch) だった」(89-90)。

自伝のなかで“wretch”という言葉が集中的に使われているのは、実際にはこのエピソードにおいてである。「アメイジング・グレイス」で歌われる“wretch”とは、普通、彼がアフリカで奴隷貿易に関わっていたときのことをまとめて指していると解釈されるが、そのなかでも特に、このキットムで愛人を持って、アフリカに同化しかけたときの姿に当てはまる。すなわち、「たくさんの危険や苦難や誘惑」のなかの「誘惑」の下にあったときである。

そしてさらにこの時期、まったく神のことを考えなかった彼は、次のように、自分は「盲目」だったとも述べている。「この種の出来事を偶然としか考えない者は何と哀れで盲目な者だろう！ 私もそのころ盲目でおろかだったので、まったくよく考えてみることもしなかった。実際に起こった出来事に何も神の導きを見つげようとしなかった。風で大きくうねる波のように、私はそのとき見えている外見によって支配されていて、それ以上深くは見ようとしなかったのだ。しかし、目の見えない者にとっての目である神は、知らず知らず私を導いてくださっていたのだ」(95-96)。

結局1747年に、ニュートンは、彼の父親が手を回して息子を救出する指示を与えたイングランドからの船によって、母国に連れ戻される。ところが、この航海において、彼の乗っていた船は大きな嵐に遭う。それはまさに「たくさんの危険」のうちでも最大の「危険」であった。1748年、乗船していた乗組員の大半が犠牲になりながらも、何とか彼は生き延びた。この「異常な体験」がニュートンの重要な改心のきっかけとなり、

彼は「自分がかつて聖職に就きたいと思っていたことを思い出しはじめた」(114)。そして、何とかアイルランドに到着するころには「祈りの声を聞き、それに答えてくれる神の存在」を確信するにいたる(126)。

3

このような体験を経て、すぐにニュートンが牧師になるのなら話も早いですが、現実にはこの後、彼は奴隷船の船長になる。この事実から、それに従事する者とその国に繁栄をもたらす重要な産業としての奴隷貿易と、ある程度の信仰とが必ずしも矛盾しなかったことがうかがえる。1750年から54年にかけてニュートンはロイヤル・アフリカン・カンパニーの船の船長として、リヴァプールを出発し、アフリカ西海岸で奴隷を集め、西インド諸島で売る、という典型的な三角貿易に従事した。この奴隷船の船長としての3回の航海において書かれた日誌の原稿が残されており、『奴隷商人の日誌』(*The Journal of a Slave Trader*)として20世紀になってはじめて出版された。これは、航海日誌としてその日の出来事が記録されたもので、事務的であるがゆえにかえって当時の奴隷貿易の実態を寒々と伝えてくれる。

まず、たとえば、集められた奴隷たちは性別・年齢・身体の高さなどで分類される。「奴隷を11人買う。内訳は、男3、女1、少年2、男児1(4フィート)、男児1、女児3(小振り)……」(*Journal* 20)。さらに番号で区別される。「午前2時ヨール到着。6人の奴隷を運んでくる。女1、男児2、女児3。どれも小さい。38から43番とする」(26)。名前を奪われることは自由を奪われることと同義である(Phipps 48)。このように「商品」として集められた黒人奴隷たちは「もの」としてカタログ化される。そこには何の感情も見つけられない。悲しみも喜びもない冷静な記述である。また、奴隷が集まりはじめると、彼らは劣悪な環境で捕らわれているため、死んでしまう者も当然出てくる。奴隷収集のカタログは、集まった奴隷の数と平行して、死んでいく奴隷の数も同様に淡々と列挙する。

しかし、こうしたカタログのなかにもときおりすこし長めの記述が紛れ込んで、ニュートン船長の感情の動きがこぼれ見えることがある。「今日、11番の女性奴隷を埋葬した。しばらく具合が悪そうだったが、2日前までまさか死んでしまうほど悪いとは思いませんでした。彼女は無気力の病 (a lethargick disorder) にかかっていた。この病にかかるとアフリカ人はなかなか回復しない」(*Journal* 29)。この「11番」という番号をつけられた女性の「無気力の病」に、彼はアフリカ人の感受性の存在を思っていたのかも知れない。彼は『アフリカ奴隷貿易に関する考察』のなかで、アフリカ人女性には「文明化した人々の繊細な感情など分らない」と「無情な」人は言うかも知れないが、ア

フリカの女性でも「貞節」な女性はいるとして、「女性に関して言うと、……私は幾度となく、イングランドの女性だったとしても恥ずかしくない、慎み深さ (modesty) や繊細さ (delicacy) を持った女性に会ったことがある」(Thoughts 97) と、述べている。「11番」はこのような女性の一人だったのだろう。

また『日誌』でも、あるアフリカ人の王族の出身者で、アフリカ人であるにもかかわらず西洋風の「上品な物腰」の持ち主だとされる人物が記録されている。

「ウィリアム・アンサー・セタラクー氏 (Mr. William Ansah Setarakoo) が船を訪問した。彼はイングランド風の服装をしたアフリカ王家の者の一人で、サプライズ号 (the *Surprise*) に乗ってアナンブー (Anambo) に向かう途中だった。彼と夜を共に過ごしたが、このあたりでは白人でも滅多に見られないようなすばらしい良識と上品さ (a politeness of behaviour) をそなえた人物だったので、おおいに楽しく過ごせた」(Journal 19)。ヨーロッパ人との関わりで、アフリカ人でも商業用の “politeness” をもって、(すくなくとも表面的には) 文明化するという例である。かつてニュートンを虐待した P. I. も西洋風の生活をしていた。「テーブル (というのは、彼女はヨーロッパ風の作法で暮らしていたからだが) にいっぱい料理がのっているのにもかかわらず、彼女は私にそれ以上の食事を与えてくれなかった」(Authentic Narrative 76-77)。

このように奴隷貿易に深く関わっていたニュートンがそこから足を洗うのは、一見すると偶然の仕業であった。奴隷船での航海を3回終えて4回目の航海に出発する直前、ニュートンは原因不明の発作で倒れる。そのためこの航海を見送らざるをえなくなる。しかしその後、ニュートンは自分が乗るはずだった船が難破したという知らせを受ける。『真実の物語』によると、この事実はニュートンにとって「神の導き」であった。「このようにここまで、つまり6年の長きにわたって、主は密かに私を導いてくれたのでした」(189)。このときまで「6年」ということは、イングランドへの帰路の激しい嵐を生き延びてからここまで、ということだ。

そして、この偶然のかたちを借りた「神の導き」が彼の人生の転機となる「恩恵」だった。これに気づいたとき、ニュートンの頭脳はこれまで以上に福音主義的になった。「私の思考はますます明瞭になり、ますます福音を信じるようになった。私は、長いあいだ悩まされてきた恐れ、かつての背教に逆戻りするのではないかという恐れから解放されたのだ。いまや私は神から恵み (grace) が与えられる誓約が保証されていることを理解しはじめた」(190-91)。『真実の物語』の原題にある “Remarkable and Interesting Particulars” というフレーズは、同時代に数多く出版されていた犯罪者の伝記や旅行記などと共通するレトリックの存在

を示す。しかし、その「驚くべき」物語の結論としてこのような「恩恵」にいたる点で、『真実の物語』は17世紀以降のピューリタンによる宗教的自叙伝の伝統に連なる (Hindmarsh 37)。また、もともと「よい知らせ」を意味する「福音」を受け取るキリスト教徒は広くすべて「福音的」と言いうるが、この時代において、ニュートンが受けた「恵み」のような福音は、英米のプロテスタントにおける熱狂的な信仰復興運動と結びついて理解される (Phipps 66)。

結果的にこの「神からの恵み」によって、ニュートンが船に乗るのを止め二度と航海に出なかったことからすると、彼にとって真の「恩恵」とは、嵐から救われたことよりも、信仰に目覚めた奴隷船の船長として内部に抱え込んでいた矛盾から解放されたことにある。この矛盾は航海中の彼の過ごし方に反映していた。彼は『日誌』に記録されているような日常業務の裏側で、夜の時間をもっぱら神に祈りを捧げて瞑想したり、イングランドで帰りを待つ妻メアリ (Mary) を思って彼女にあてた手紙を書くことで過ごしていた。生涯にわたって書かれたニュートンからメアリへの手紙は、彼女の没後、『妻への手紙』(Letters to a Wife) としてニュートン自らの手で出版された。そこには船長としての3回の航海で書かれた手紙も含まれている。その大半は熱烈なラブレターで、彼女の不在を思うと「涙が紙に落ちる」(Letters 1:72) ほどの愛情が綴られたものだ。『日誌』も読むことのできる現在の読者にとって、両者の対比はショッキングですらある。1回目の航海の途中、1751年1月8日 (ちなみに、これは前述の「11番」と呼ばれた女性奴隷が死去した前日) 付けの書簡にこうある。「私のような体験をしたことのない者は誰も私の現在の状況を想像することはできないでしょう。奴隷たちや商人たちの騒音で気を散らされ、暑さで息もできないほどで、おしゃべりで元気もなくなる [昼間と]、あなたといっしょに過ごす甘く心地よい夕べとの対比を」(1:48)。当時の交通事情を考えても、現実的にはほとんど返信を期待することなく書かれただろうこれらの書簡にあふれる不在に向けた愛情の吐露は、この「対比」の矛盾に対する代償行為であろう。「恩恵」は、このような「迷える者」として「苦難」にあった彼を解放したのである。船を降りたニュートンは、その後、ジョージ・ホイットフィールド (George Whitefield) やウエズリーらとも知り合って、本格的に聖職を目指すことになる。『真実の物語』はこの過程で牧師の職を得るために書かれた手紙であった。それは彼に「真実の」福音が訪れたことを示すための「物語」でもある。ニュートンは『真実の物語』に感動したダートマス伯 (Lord Dartmouth) の目に留まってオルニーに牧師禄を得ることができた。幼少の頃に非国教徒の母親に育てられたニュートンは、こうして英国国教会の牧師となった。また『真

実の物語』の出版によって、彼は福音主義運動における「国際的に有名な人物」(Hindmarsh 15)にもなった。

さらに1780年からロンドンの聖メアリ・ウルノース教会(St. Mary Woolnoth Church)に移ったニュートンは、国会議員として奴隷貿易廃止運動に関わるウィリアム・ウィルバーフォース(William Wilberforce)などに影響を与える。それは福音主義運動が「かつてないほど」政治的言説と関わっていた時代であった(Hindmarsh 325)。『アフリカ奴隷貿易に関する考察』は、この文脈で書かれたパンフレットである。そのなかでニュートンは奴隷貿易廃止の「政治的」な重要性を説いている。彼は、そのひとつの理由として現行のアフリカ貿易のリスクと損失の大きさについて述べた後、もうひとつの理由として次のように「精神」への弊害を説き、感受性の語彙を使った説得を試みる。

第二点目もまた、政治的観点から重要だと思われる問題である。それはつまり、奴隷貿易の、それに従事する者に対する恐ろしい影響のことである。そこにはたしかに例外はあるし、私自身も例外だと言いたいが。しかし、一般にこれほどまでに人の道徳感覚を消し去り、人の心から優しい人間的な性質を奪い、心を鋼のように堅くして、感受性によるすべての印象(all impressions of sensibility)を感じられなくするような影響を直接及ぼすお金の稼ぎ方はほかにはない。それは辻強盗以上だ。(Thoughts 89-90)

ニュートンはパンフレットの別のところで、ひどい場面ばかり見ていると「野蛮な無感覚」(savage insensibility)に陥ってしまうとも述べている(94)。適切な感受性が適切な道徳感覚を生む。または逆に適切な道徳感覚にもとづくものが適切な感受性である。そこでは心に伝わる「印象」が何にもまして重要な証拠とされる。このような感受性の文学の時代に典型的な共感のレトリックを、ニュートンも用いている。しかも、それを「政治的観点」に含めているのだ。このパンフレットの最後の一節で彼は次のように述べる。「私は30年以上前のことを記憶に頼って書いていると読者にお知らせしておいた。しかし同時に、私がアフリカ沿岸で見たり、聞いたり、感じたりしたことは深く私の記憶に刻まれているので、記憶力があるあいだ私はほとんど忘れることはないし、大きく記憶違いすることもないだろう」(116)。感受性に刻印される「記憶」、この感受性の力が、彼の過去の体験の「告白」をアポリシヨンのための政治的な「告発」にしているのだ。

4

以上のような背景を考えに入れると、「アメイジン

グ・グレイス」は、同じく18世紀起源で、同じく元来の出典を離れ、また今日でも同じくよく知られ歌われる「ルール・ブリタニア」(“Rule Britannia”)と対照をなす歌だと言えるかも知れない。もともと「ルール・ブリタニア」は、ジェイムズ・トムソン(James Thomson)とデイヴィッド・マレット(David Mallett)共作の『アルフレッド』(Alfred)という仮面劇の末尾で歌われる、デーン人を打ち破ったサクソンの王アルフレッドを讃える歌であった。このオードの有名なリフレインが、「統治せよ、ブリタニアよ、大海原を治めよ。／ブリトン人はけっして奴隷にはならない」

(“Rule, Britannia, rule the waves;/ Britons never will be slaves,” Thomson and Mallett 253)である。仮面劇の作者である二人のスコットランド人が「ブリタニア」に抱いていたであろう複雑な思いを別にして、このフレーズの裏側には、「大海原」を支配するイギリスの、植民地主義拡大にとまって生じる他者に対する恐怖、「奴隷」を作り出す者の側が「奴隷」にされることの恐怖が張り付いている。それが逆に愛国主義的かつ好戦的なメッセージを強化する。一方、「アメイジング・グレイス」は、これとはまったく対照的な立場から発せられている。それはかつて「奴隷のようなもの」で、「人間としてもっとも哀れな状態」にあった者の言葉である。たしかにそこには同様の恐怖が張り付いているが、植民地拡大を求めるものではない。逆にそれは、海を渡って現実にかつて植民地奴隷であった者の子孫を含む人々に歌い継がれていった。また、その「恩恵」は同時代の奴隷貿易廃止運動の底にも刻まれる福音をとまっていた。それがこの歌の持つメッセージに普遍的な力を与えているのだ。おそらく宗派も国籍も人種も時代も超えて……。ちなみにニュートンは、象徴的と言ってよいが、1807年イギリスで奴隷貿易が廃止された年に亡くなった。

※本稿は、18世紀イギリス文学・文化研究会(2006年4月22日、専修大学)における口頭発表に加筆・修正を加えたものである。

注

- 1) もともと『オルニー聖歌集』でのタイトルは、“I. Chronicles. Hymn XLI. Faith’s Review and Expectation. Chap. Xvii. 16, 17”で、元になった『歴代誌上』の一節を示すものだった。
- 2) 最初に“New Britain”として掲載された楽譜は Marrocco and Gleason 256で見ることができる。
- 3) 詳細はTurnerを参照。また、拙論「恩恵を想像すること—『イマジン』と『アメイジング・グレイス』に見る救済のかたち」、『20世紀ポピュラー音楽の言葉：その文学的および社会的文脈の解明』平成16年度—平成17年度科学研究費補助金基盤研究C(研究代表者：田所光男、課題番号：16520205)研究成果報告書、2006年2月、67-80を参照。
- 4) Phippsの評伝は、「アメイジング・グレイス」をニュート

ンの人生を凝縮した「カメオ」だとして (ix), 詩からとったフレーズを各章のタイトルに使っている。

- 5) 参考のため、『オルニー聖歌集』に収録された「アメイジング・グレイス」の原典となった詩とその日本語訳を以下に示す。

Amazing grace! (how sweet the sound)
That sav'd a wretch like me!
I once was lost, but now am found,
Was blind, but now I see.

'Twas grace that taught my heart to fear,
And grace my fears reliev'd;
How precious did that grace appear,
The hour I first believ'd.

Through many dangers, toils, and snares,
I have already come;
'Tis grace has brought me safe thus far,
And grace will lead me home.

The Lord has promis'd good to me,
His word my hope secures;
He will my shield and portion be,
As long as life endures.

Yes, when this flesh and heart shall fail,
And mortal life shall cease;
I shall possess, within the [veil],
A life of joy and peace.

The earth shall soon dissolve like snow,
The sun forbear to shine;
But God, who call'd me here below,
Will be for ever mine.

(Newton and Cowper 53-54)

驚くばかりの恵み！(何て甘美な響き)
その恵みが私のような哀れな者を救ってくださいました。
かつて迷える者であった私が、今や見出され、
見えなかった目が、今は見えます。

私の心に恐れることを教えてくださったのは恵み、
そしてその恐れから救い出してくださったのも恵みでした。
その恵みが何と尊く見えたことでしょう、
はじめて信じたあの時のこと。

たくさんの危険と、苦難や誘惑をくぐり抜け、
私はここまで来ることができました。
ここまで安全に来られたのも恵みのおかげ、
そして恵みが私をこれから故郷まで導いてくれるでしょう。

主は私に堅く約束してくださいました、

主の言葉が私の希望を確かなものにしてくださいました。
主が私の盾、私の運命になって下さるでしょう、
この命が続くかぎり。

そう、この肉体と精神が衰えて、
そして、死すべき命が終わるとき、
私は手に入れるでしょう、ヴェールのなかで、
喜びと平安の命を。

地球が雪のように溶け、
太陽も輝きを失ったとしても、
私をここに招いてくださった神は、
永遠に私のものとなることでしょう。

引用文献

- Hindmarsh, D. Bruce. *John Newton and the English Evangelical Tradition: Between the Conversions of Wesley and Wilberforce*. Oxford: Clarendon, 1996.
- Marrocco, W. Thomas, and Harold Gleason. *Music in America: An Anthology from the Landing of the Pilgrims to the Close of the Civil War. 1620-1865*. New York: Norton, 1964.
- Marshall, Madeleine Forell, and Janet Todd. *English Congregational Hymns in the Eighteenth Century*. Lexington: UP of Kentucky, 1982.
- Newton, John. *An Authentic Narrative of Some Remarkable and Interesting Particulars in the Life of ******. Communicated in a Series of Letters, to the Reverend Mr. Haweis, Rector of Aldwinckle, Northamptonshire, and by him (at the Request of Friends) Now Made Public. London: Printed by R. Hett, for J. Johnson, 1764.
- . *The Journal of a Slave Trader*. Eds. Bernard Martin and Mark Spurrell. London: Epworth Press, 1962.
- . *Letters to a Wife*. 2 vols. London: Printed for J. Johnson, 1793.
- . *Thoughts upon the African Slave Trade*. London, 1788. *Slavery, Abolition and Emancipation: Writings in the British Romantic Period*. Ed. Peter I. Kitson. London: Pickering and Chatto, 1999. 2: 75-117.
- , and William Cowper. *Olney Hymns*. London: Printed and Sold by W. Oliver; Sold also by J. Buckland; and J. Johnson, 1779.
- Phipps, William E. *Amazing Grace in John Newton: Slave-Ship Captain, Hymnwriter, and Abolitionist*. Macon, Georgia: Mercer UP, 2001.
- Rivers, Isabel. "Religion and Literature." *The Cambridge History of English Literature, 1660-1780*. Ed. John Richetti. Cambridge: Cambridge UP, 2005. 445-70.
- Thomson, James, and David Mallet. *Alfred: A Masque. The Works of James Thomson*. London: A. Miller, 1766. 3: 207-55.
- Turner, Steve. *Amazing Grace: John Newton, Slavery and the World's Most Enduring Song*. Oxford: Lion Hudson, 2005.

(平成18年9月11日受理)